

氏 名	あき 秋 やま 山 ひろ 裕 ゆき 之
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人 博 第 208 号
学位授与の日付	平成 15 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 文 化 ・ 地 域 環 境 学 専 攻
学位論文題目	グイ・ブッシュマンの子どもの対人関係と近代化による影響に関する人 類学的研究 ——ボツワナ共和国カデ地区及びニューカデ地区の事例——
論文調査委員	(主 査) 教 授 田 中 二 郎 教 授 市 川 光 雄 助 教 授 太 田 至 助 教 授 木 村 大 治 (アジア・アフリカ地域研究研究科)

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ボツワナ共和国中央部に居住するグイ・ブッシュマンの子どもの生活を記述し、子どもの相互行為の分析からグイの行動規範を抽出するとともに、子どもの社会化の場としての親族を論じたものである。また、近年急激に進む近代化の影響を子どもに焦点を当てて報告し、グイ社会の将来について展望した。

第1章では、先行研究に基づいてグイを歴史的に概観した。広大な動物保護区内を移動生活していたグイが、1970年代末から政府の開発計画によって保護区内のカデ地区に定住するようになったことと、1997年に保護区外に新しく作られた計画村ニューカデに移住させられた経緯を述べた。とくに居住形態の変化に注目し、居住集団であるキャンプが頻繁に離合集散していた「移動生活時代」、キャンプは存続したもののその離合集散性と移動性が著しく小さくなった「カデ時代」、キャンプが外縁を失って家々が密集した「ニューカデ移住後」に時代区分した。

第2章では、カデ時代のグイの子どもの日常生活を記述した。子どもは学校以外では親族とばかり付き合うことを指摘し、男子は同じキャンプに住む年長の子どものや青年を観察し真似ることによって生活に必要な技術を習得すると述べた。また、子どもの遊びなどに学校からの影響がみられることを示した。さらに、ニューカデへの移住に際して、就学者の一部が学校の移転に伴い、親よりも先に移住したことを取り上げた。移住開始から1ヶ月の時点において、15歳以下の乳幼児および学齢児全員について誰と同居しているか調査した結果、子どもは父方親族よりも母方親族と同居する傾向があることを明らかにした。

第3章では、子どもどうしおよび子どもと大人との相互行為を親族名称関係を軸に分析した。その分析から、キョウダイが隣り合わせに座らないことなど、親族名称関係別に相互行為のパターンがあることを明らかにした。また、相互行為の濃淡は居所や血縁の遠近によるとして、それを生活距離と呼び、子どもをケアする者は生活距離の近い特定の親族であることを示した。

従来、グイの親族関係における行動規範については、冗談関係と忌避関係に二分できるとされていたが、本論文では、相互行為を二者間の親族名称関係、性、年齢差、生活距離から検討した結果、冗談／忌避の二分法は有効な分析概念でないことを指摘し、同年代の異性を分離する「インセストに関わる規範」と親族名称関係に関わらず存在する「長幼の序」が対人行動における規範の二大原理であると論じた。

また、子どもが、相互行為の相手となる人物の名前よりも先に親族名称を覚えること、およびグイの親族名称には、血縁関係が複雑で親等の大きい二者の関係を単純化かつ近縁化する働きがあることを指摘し、子どもと一緒に暮らしているキャンプの大人は扶養者候補か甘えられる相手の候補になることを明らかにした。さらに、それら候補の中から生活距離の近い者が実際に子どもを扶養し、甘えさせる事実から、グイ社会は、居住集団が頻繁に離合集散する中で、誰にもケアされない子どもが生じにくいような規範と体系を備えていることを指摘し、それを「子どもを庇護する体系」とであると論じた。

第4章では、ボツワナ政府のニューカデ移住政策によって、生業や居住形態などを中心にグイ社会がツワナ化されつつあることを指摘し、とくに子どもに焦点を当てて近代化の影響を示した。

まず、子どもの所有物が増え、所有物数の個人差が拡大していることを明らかにした。子どもの所有物の入手経路を調査し、子どもは親・キョウダイ・祖父母を中心とした近しい親族と学校から多くの物を得ており、親の貧しい者や中途退学者は物に恵まれにくいことを見いだした。

また、カデ時代の子どもは、放課後は近くに住む親族と遊んでいたが、ニューカデでは放課後も就学者と中途退学者が別行動を取るようになったことを挙げ、交友関係が変化しつつあることに注目した。ニューカデは居住集団単位の境界がない密集した居住形態であるため、カデ時代には出会う機会のなかった中途退学者どうしが容易に出会えるようになったことが、交友関係の変化の要因である。

最終第5章では、これまでの章を総合し、子どもと社会の相互作用を論じた。グイの子どもの交際相手は近くに住む近親者であったが、同年代の非血縁者を含むようになったことと、ニューカデ移住によって就学者と中途退学者に分かれるようになったことをふまえ、同年代の非血縁者には交叉イトコと同じ *ngoa?o* という親族名称が用いられることから、子どもどうしの関係は、身近な親族から非血縁の *ngoa?o* に交友関係の重心が移りつつあると述べた。

親族関係にある年齢差を含んだグループにおいて、長幼の序とインセストに関わる規範のもとで相互行為を重ねるのが、グイの子どもの社会化過程の重要な部分である。よって、同年代でありインセストの対象でない非血縁の *ngoa?o* との交際が増えることは、グイの子どもの社会化過程が変化することを意味する。親どうしが疎遠なカップルの結婚が増えることによって姻族関係のあり方が変化する可能性があるなど、社会の近代化に伴う子どもの社会化過程の変化は、親族を基盤としていた社会に構造的変化をもたらすと結論づけた。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は、グイ・ブッシュマンの子どもの相互行為の分析から、グイ社会における対人行動の規範と親族のあり方を論じ、国家の近代化政策による変化を子どもの社会化過程の変化として位置づけ、子どもと社会の相互作用を論じたものである。子どもが他者ともつ相互行為を親族名称関係ごとに分析することによって、子どもと親族の人々との血縁関係に応じた関わり方を具体的に論じている点に特色がある。グイの子どもの社会化過程の重要な部分が親族との相互行為の積み重ねにあるとした筆者の視点は、ブッシュマン研究者の間で広く受け入れられるものであり、そこに立って豊富な定量・定性データを基に議論を組み立てた本研究は、ブッシュマン研究のみならず、文化と社会化過程の関係について心理人類学や文化心理学などの分野で交わされている一連の議論に大きな貢献をなす。

本論文の注目すべき骨子は、以下のように要約できる。

- (1) 従来、グイにおける対人行動の規範は、性と血縁関係の組み合わせによって冗談関係と忌避関係に二分できるとされていた。しかし本論文は、実際の相互行為を詳細にみることによって、冗談／忌避による二分法はグイの規範を理解するうえで適切でなく、「インセストに関わる規範」と「長幼の序」が対人行動規範の二大原理であると論じた。とくに長幼の序は年長者が年少者をケアすることと一体のものであるとし、従来忌避関係を表す心理状態といわれていた畏怖の念は、子どもどうしの関係を含めた長幼の序に基づくとした申請者の論点は斬新である。従来の研究では冗談／忌避の枠組みを優先するあまり、インセストや年功序列的な規範と冗談／忌避の枠組みとの整合性を保つことが困難であった。本論文では、インセストの規範の中心は同年代の異性を遠ざけることにあり、長幼の序は性や血縁関係に関わらず広く存在するとして、性と血縁関係による二分法を退けた点において革新的であり、内外のブッシュマン研究者の関心と呼ぶであろう。
- (2) グイの子どもがグループで遊ぶときに、年少の子どもをケアするのは、生活距離の近い者である。また、祖父母と同じキャンプに住まない子どもは、祖父母と同じ親族名称をもつ老人のなかで生活距離の近い者に甘える。子どもは周囲の人々の名前よりも先に自分からみた親族名称を覚え、親族名称は親族とみなされる広範囲の人々を4親等までの血縁関係を表す関係に分類する。以上の事実から、本論文は、グイの親族のあり方は、子どもをケアする大人を絶やさないう「子どもを庇護する体系」であると論じた。これまでブッシュマンの社会組織は親族を基盤にしていることが再三指摘されてきたが、データに基づいて子どもからみた親族のあり方を考察したものはない。本論文における議論は、子どもの相互行為のあり方から地

域社会や文化を考える試みとして、高く評価できる。

(3)近代化による子どもへの影響の最たるものは学校教育の導入である。ニューカデに移住後、地理的要因および居住形態の変化によって、学校の影響は一層強くなった。中学校進学率の上昇、所有物数における就学者と中途退学者の格差、就学者と中途退学者が別々に遊ぶようになりつつあることなどが、本論文によって明示された。ブッシュマン社会の近代化に関して、子どもに焦点を当てたものは少なく、本論文は注目に値する。申請者は、学校の影響は就学者にだけ及ぶのではなく、学校に行かない子どもをも「中途退学者」としてカテゴライズすると述べた。この論点は、広く「未開社会の近代化」における子どもと学校との関係を考えるうえで、示唆に富むものである。

(4)学校教育と居住形態の変化によって、子どもの交友相手が年齢差を含んだ近親者から、同年代の親族・非親族に関わらない子どもに変わりつつある。子どもの社会化過程の重要な部分は親族との相互行為の積み重ねにあるとの前提に立てば、それは子どもの社会化過程の変化であるといえる。ブッシュマン社会の近代化に関する従来の研究は、生業面の変化や居住形態の変化、それに伴う社会関係の変化など、大人を対象としたものがほとんどである。近代化による社会変化を子どもの社会化過程の変化とした本論文の視点は、近代化政策の影響を受けた狩猟採集民社会の動態を捉えるうえで、また子どもと社会の相互作用を考えるうえで、極めて意義深いものである。

本論文はグイの社会化過程全体を論じるには至っていない。今後、青年に関する調査と総合して、グイの子どもから青年期を経て大人になるまでの社会化過程を明らかにするとともに、ブッシュマンに留まらず、他の地域や社会との比較を視野に入れた研究を期待したい。

以上のように、本学位申請論文は、実証的データに基づいて狩猟採集民研究における重要な事例と論考を示しただけでなく、文化と子どもの関係に関する多くの議論に貢献するものであり、文化・地域環境学専攻アフリカ地域研究講座にふさわしい内容を備えたものと言える。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成15年1月27日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。